

21世紀、日本がめざす男女共同参画社会。その理想と現実のギャップをみつめ、新時代の流れをつくりだすための、12人の熱いメッセージ――

男女共同参画社会の実現とは、  
いのちの基本にもどるといって、いちばん  
穏やかでたおやかな笑顔の「革命」なんです

野中ともよ  
ジャーナリスト



今年10月、男女共同参画会議・基本問題専門調査会は、「女性のチャレンジ支援策について」の中間まとめを公表し、広く意見を募集している(11月末まで)。女性の活躍度を示すGEM(ジェンダー・エンパワメント指数)は、66か国中32位、「国際競争力報告2001」20002(世界フォーラム)では女性の経済活動状況が75か国中69位という日本の現状をふまえてのものだ。なぜ、男女共同参画は遅々として進まないのか。ジャーナリストの野中ともよさんは「それは、これまで男性が「○」で、女性が「×」だったから、両方から歩み寄って「△」にしようというアプローチにとどまっているから。男性中心のシステムがいかにおかしかったのかという反省からスタートしないと解決のベクトルは見えてこない」と言う。

数値目標を決めて、組織や機関に女性の数を増やしていこうというのも、女性が活躍できる環境づくりを進めようというのも、一つのアプローチの仕方です。でも、それはほんの一部でしかない。「男女共同参画」を、ほんとうにいまの日本で実のある形で進めていくには、時系列的にも空間的にも、もっと広角レンズで大きなところをやる必要があると思います。

## 「いのちのバトンタッチ」こそ

空間的に視界を広げよう。まずは地球というレベルでみると、地表の限られた平地を中心に60億粒の人類がひしめいている。もっとよくみれば、そこには、ゾウにネズミ、虫や魚や鳥、木や草花、そして単細胞生物に至るまで、2000万種類以上のいのちが息づいている。時系列的にみると、そのいのちの普及は、38億年前にさかのぼれるといわれている。そして、およそ300万年前に「人類」という種があらわれて、今日まで、「いのちのバトンタッチ



(のなか・ともよ)ジャーナリスト。上智大学大学院文学研究科新聞学専攻博士前期課程修了。米ミズーリ・コロンビア大学大学院でフォト・ジャーナリズムを専攻、帰国後、フリージャーナリストとして活動開始。ニュース番組のキャスターとしても活躍の場を広げ、92年～96年には『ワールド・ビジネスサテライト』のメインキャスターを務める。現在は、財政制度審議会委員をはじめ、政策提言の場でも活躍中。

をつづけてきている。

この「いのちの再生産」こそ、まさに男女共同参画プロジェクトなんです。多くの生物が「男」と「女」というセクシュアリティに大きく2分されているのは、2つの性が共同参画したほうが、よりよいいのちのバトンタッチができるからです。つまり、いのちの基本は「男女共同参画」であり、人間の社会は、男女が力を合わせなければやっていけない。沖縄で、第一次産業に精を出す「おじい」と「おばあ」は、力をあわせて働いて、子を養い、生産し、家庭や地域社会をきりもりしてきた。タイムカードもなければ、定年もない。労働組合もありません。でも、そこは、ある意味でまったくの男女共同参画社会です。

## お金は幸せの担保じゃない

ところが、戦争に負けて焼け野原から再出発することになった日本は、生産性を上げるために、男はもっぱら生産活動をにない、女はつぎの世代を生み育てるというドメスティックビジネスを引き受けるというルールを採用した。高度成長時代のはしりに、「鉄は国家なり」といわれ、産業を支える「基幹」労働者は、月に1度の生理もないし、愛し合った結果いのちを宿すこともない、使い勝手がいい男性でした。彼らが効率良く働けるシステムを、政府も、企業も、労働組合もつくった。そこでは、より多くの分配をゲットすることが重要な関心事であり、富は幸せにシンクロしていると思われてきた。でも、企業の生産性が上がって、お父さんの給料が上がっても、子どもが将来に希望をもたず、問題行動を起こしているとしたら、人として幸せではありませんね。十数年前なら、お父さんの給料が上がれば、家族全員が幸せになれ

ると思えたかもしれない。でもいま、そのために休日返上で働かなければならないといったらどうでしょう。私が妻なら「やめて」と言います。パパがうちに来てくれるほうがいい、家族で過ごす時間はなにもにも替えがたい。バブルを経て、一つの信用秩序がある日崩れたら「お金を持っているからこそ不幸になってしまおう」ということも私たちは経験しました。そしていま、情報化時代というパラダイムにおいて、日本経済は見る影もなく疲弊し、従来のシステムが機能しなくなっている。

だとしたら、必要なのは、改革や改善ではない、「革命」です。流血の革命ではなくて、いのちの原点にもどるといって、いちばん穏やかでたおやかな革命。「男女が力を合わせて」という、いのちの本来のルールを基本にしないと、よりよい人間社会が築けない。そこから、新たなシステムをつくるという笑顔の革命です。だから、「いまこそ女性は立ち上がる」なんて言いません。「ちょっと落ち着いて、座って話さうよ」って呼びかけたい。

労働組合だって、そこに気づいたら、自分たちがやるべきことを見えてくると思います。「企業の活性化のために女性の能力を生かそう」と言うけど、企業が根をおろさせてもらっているのは人間社会でしょう。男性中心のルールを変えないままで、女性に間口を広げるという発想でいいんですか。そうじゃないでしょう。単身赴任で、ずっとお父さんがいなかったら、子育てなんてできない。労働組合には、そういう働き方の問題をあぶりだすことからやってほしい。ハチマキを締めてメインストリートでデモすることが、もはや組合の力を発揮する方法ではないという時代に、早く気づいてほしいと思っています。

